

マタイによる福音書21章 「御国の前で滅びる宮」

1A エルサレム入城 1-17

1B ホサナの歓喜 1-11

2B 宮清め 12-17

2A いちじく木の呪い 18-22

3A 悔い改めない者 23-46

1B ヨハネの権威 23-27

2B 二人の息子 28-32

3B ぶどう園の農夫 33-46

本文

マタイによる福音書 21 章を開いてください。私たちの学びはついに、イエス様が十字架に付けられる最後の週に入ります。これまでガリラヤで宣教を行われ、そしてペレア地方、それからエリコを通してユダヤ地方に入りました。今回は、エリコでイエス様の地上生涯の最後の最後で、目を開けていただき弟子としてついてきた男たちの話を読みました。そしてエルサレムです。

1A エルサレム入城 1-17

1B ホサナの歓喜 1-11

1 さて、一行がエルサレムに近づいて、オリーブ山のふもとのベテパゲまで来たそのとき、イエスはこう言って、二人の弟子を遣わされた。2 「向こうの村へ行きなさい。そうすればすぐに、ろばが見つながれていて、一緒に子ろばがいるのに気がつくでしょう。それをほどこいて、わたしのところに連れて来なさい。3 もしだれかが何か言ったら、『主がお入り用なのです』と言いなさい。すぐに渡してくれませう。」

ヨハネの福音書を読むと、イエス様の一行はベタニアにある、マルタ、マリア、ラザロの家に宿泊されました。エルサレムまではあと 2.5 キロのところにあります。そこから西に歩かれて、オリーブ山の東の麓にあるベテパゲという村まで来られました。そして、イエス様は十分な用意をして、エルサレムの城に入れられます。「ろば」がいて、それから「子ろば」がいます。そして、ガリラヤでの宣教旅行でそうであったように、弟子を二人一組にして遣わしておられます。そして、イエス様がそのろばとろばの子が入用なのだと言え、すぐに渡してくれるということ。それだけ、今、イエス様が主として、王として迎え入れられる、高揚した空気に包まれていたのでしょう。

4 このことが起こったのは、預言者を通して語られたことが成就するためであった。5 「娘シオンに言え。『見よ、あなたの王があなたのところに来る。柔和な方で、ろばに乗って。荷ろばの子であ

る、ろばに乗って。』」

21 章からは、なんといいのでしょうか、神の預言の幻が最も色濃く表れる出来事が続きます。イザヤは、エルサレムのことを「幻の谷」と呼びましたが、ケデロンの谷とヒノムの谷に囲まれているエルサレムに対して、主は膨大な数の預言と幻を与えられました。ちょうどそれは、ステージに、いろいろな色のスポットライトが一箇所に当てられていると言えよいでしょう。今、ここでは直接的な預言はゼカリヤ書です。ゼカリヤはメシアがエルサレムに来られる時に、ろばの子に乗って来られることを預言しました。「9:9 娘シオンよ、大いに喜べ。娘エルサレムよ、喜び叫べ。見よ、あなたの王があなたのところに来る。義なる者で、勝利を得、柔和な者で、ろばに乗って。雌ろばの子である、ろばに乗って。」ソロモンが即位した時に、彼は雌ろばに乗って、ギホンの泉で油注がれました。ですから、平和の君としての意味合いがあります。

そして、今朝朗読した詩篇 118 篇の後半は、21 章から 23 章までの背景を知るには必ず必要な預言になっています。再び読んでみます、19 節からです。

19 義の門よ私のために開け。私はそこから入り【主】に感謝しよう。20 これこそ【主】の門。正しい者たちはここから入る。21 私はあなたに感謝します。あなたが私に答え私の救いとなられたからです。22 家を建てる者たちが捨てた石それが要の石となった。23 これは【主】がなされたこと。私たちの目には不思議なことだ。24 これは【主】が設けられた日。この日を楽しみ喜ぼう。25 ああ【主】よどうか救ってください。ああ【主】よどうか栄えさせてください。26 祝福あれ【主】の御名によって来られる方に。私たちは【主】の家からあなたがたを祝福する。27 【主】こそ神。主は私たちに光を与えられた。枝をもって祭りの行列を組め。祭壇の角のところまで。

今、主の門を通して入って来て来る者が、主が救いとなられたことを感謝して、入ってきています。そして非常に不思議な言葉を語り、それが 22 節です。家を建てる者が捨てた石が、要の石となったということ。それが主がなかって、不思議だということ。しかし 24 節で、「これは【主】が設けられた日。この日を楽しみ喜ぼう。」と言っています。この日というのは、今日の日ではなく、まさしくメシアがエルサレムに来られる日のことであり、イエス様が棕櫚の聖日の日曜日に、このようにエルサレムに入城されることによって成就したのです。そして 25 節の「救ってください」が「ホサナ」です。歡喜して、この方が救ってくださると喜んでいいるのです。そして、この方をほめたたえています、26 節です。「祝福あれ【主】の御名によって来られる方に。」この言葉は、21 章にも、またイエス様が 23 章の最後でも引用されます。そして、主が私たちに光を与えられたとして、「枝をもって祭りの行列を組め。」とあります。これが、これから見る風景です、群衆が枝をもって列を組んでいる姿を見ます。「祭壇の角のところまで」とありますね、意味深なことが書かれていますが、そこで罪のいけにえが捧げられています。イエス様が、罪のいけにえとして屠られることを印象付けています。

そして、ダニエル書 9 章においては、エルサレムとユダの民について、七十週が定められているという預言があります。エルサレムの城壁が再建される命令が出てから、七十週、すなわち七十年の七倍で 490 年ですが、そうしたら罪が終わり、咎の宥めが行われ、永遠の義がもたらされ、預言と幻が確証し、至聖所に油が注がれるとのこと。そして七週と六十二週の後、メシアが断たれるという預言があります。26-27 節を読みます。「26 その六十二週の後、油注がれた者は断たれ、彼には何も残らない。次に来る君主の民が、都と聖所を破壊する。その終わりには洪水が伴い、戦いの終わりまで荒廃が定められている。27 彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物をやめさせる。忌まわしいものの翼の上に、荒らす者が現れる。そしてついには、定められた破滅が、荒らす者の上に降りかかる。」油注がれた者、メシアが断たれます。そのエルサレム再建の命令が出された時から数えると、69 週という 483 年後は、おそらく紀元後 30 年になります。そうです、イエス様がエルサレムに入られた時です。

そして、その後にメシアの痕跡がなくなり、都も至聖所も破壊されますが、ローマによって紀元 70 年に破壊されました。そして、洪水が来るとありますが、これは軍隊のことで、戦いが終わりまで続き荒廃が続きます。これも、ローマからビザンチン、ビザンチンからイスラム、イスラムから十字軍、十字軍からイスラム、そしてマムルーク、そしてオスマン・トルコで、英国統治に続き、そして今のイスラエルになります。それから、七十週目、最後の七年ですが、そこで荒らす忌むべき者が出てきます。これをイエス様が、マタイ 24 章で引用されます。21 章ではダニエル 9 章 26 節の「その六十二週」ということの成就です。

それからもう一つ、出エジプト記 12 章を開きます。「2 「この月をあなたがたの月の始まりとし、これをあなたがたの年の最初の月とせよ。3 イスラエルの全会衆に次のように告げよ。この月の十日に、それぞれが一族ごとに羊を、すなわち家ごとに羊を用意しなさい。4 もしその家族が羊一匹の分より少ないのであれば、その人はすぐ隣の家の人と、人数に応じて取り分けなさい。一人ひとりが食べる分量に応じて、その羊を分けなければならない。5 あなたがたの羊は、傷のない一歳の雄でなければならない。それを子羊かやぎのうちから取らなければならない。6 あなたがたは、この月の十四日まで、それをよく見守る。そしてイスラエルの会衆の集会全体は夕暮れにそれを屠り、7 その血を取り、羊を食べる家々の二本の門柱と鴨居に塗らなければならない。」過越の祭りです。この第一の月をニサンの月と言いますが、その十日に羊が容易されます。そして十四日に屠られて、日没後、十五日にその肉を食べます。その過越の羊は当時、ベツレヘムで育てられていましたが、イエス様はベツレヘムでお生まれになりました。そして、今、棕櫚の聖日はニサンの月の十日に当たります。イエス様は、この日にエルサレムにお入りになり、過越の子羊とされたのです。

6 そこで弟子たちは行って、イエスが命じられたとおりにし、7 ろばと子ろばを連れて来て、自分たちの上着をその上に掛けた。そこでイエスはその上に座られた。8 すると非常に多くの群衆が、

自分たちの上着を道に敷いた。また、木の枝を切って道に敷く者たちもいた。9 群衆は、イエスの前に行く者たちも後に続く者たちも、こう言って叫んだ。「ホサナ、ダビデの子に。祝福あれ、主の御名によって来られる方に。ホサナ、いと高き所に。」

弟子たちが上着をろばの子に乗せたこと、そして多くの群衆が道に上着を敷いたのは、王であり勝利者である人が町に入って来る時に喜び迎えることです。かつて、エフーという人が王になった時に、そこにいる人々が大急ぎで上着を抜いて、彼の足元に敷いて、「エフーは王である」と言った場面が出てきます(2列 9:13)。今、非常に多くの群衆が来ていますが、ガリラヤ、ペレアから、そしてユダヤ地方に入ってから、次々と群衆がついて来たのでしょう。イエス様が様々な奇蹟を行っていたので、これでエルサレムに入って、異邦人の支配、ローマを力をもって打ち砕くという期待を持っていたものと思われます。

そして、「木の枝を切って道に敷く」とあります。これは、先の詩篇 118 篇にあった預言の成就でもあり、また仮庵の祭りで用意するものです。メシアが来れば、ゼカリヤ 14 章にあるように仮庵の祭りが始まることを期待していたのです。マカバイの戦いでも、その期待をもって棕櫚の枝をもって敵を倒した後にエルサレムに入りました(1マカバイ 13:51)。そして、先ほど説明したように、彼らは熱狂的に詩篇 118 篇にあるメシアへの賛美を、イエス様に向けて叫んでいます。「ホサナ、ダビデの子に。祝福あれ、主の御名によって来られる方に。ホサナ、いと高き所に。」

10 こうしてイエスがエルサレムに入られると、都中が大騒ぎになり、「この人はだれなのか」と言った。11 群衆は「この人はガリラヤのナザレから出た預言者イエスだ」と言っていた。

イエス様がお生まれになったことを星で知った東方の博士たちが、エルサレムに訪問した時も、エルサレム中の人々が王と共に動揺したとあります(2:3)。それと同じ、いやそれ以上でありました。群衆は、メシアに向けられた詩篇を歌って、メシアとしてあがめていながら、ここでは「ガリラヤのナザレから出た預言者イエスだ」と言って、預言者であるとしています。しっかりと統一されているわけではなく、みな非常に熱狂している状態です。

間もなく過越の祭りが始まりますが、あらゆるところから巡礼者がやってきます。当時、エルサレムは 4 万 5 千人だったほどですが、過越の祭りや仮庵の祭り、五旬節のような時には 15 万人から 20 万人に膨れ上がるそうです。町は非常に混雑しており、周辺には天幕や仮小屋が立ち並んでいたそうです。興奮と熱狂で立ち込めていたそうです。それに加えて、二人の政治指導者がエルサレムに来ます。ローマは、カイサリアから総督が治安を守るために来ます。大祭司の装束の管理をしていたそうで、この時に大祭司に装束を渡すのだそうです。そしてヘロデも宮殿からエルサレムに来ました。その中で、イエス様がろばの子に乗って来られたのですから、熱狂と興奮に混じって、一体全体何のことが起こっているのか？というのが、人々の反応だったのです。

2B 宮清め 12-17

12 それから、イエスは宮に入って、その中で売り買いしている者たちをみな追い出し、両替人の台や、鳩を売る者たちの腰掛けを倒された。13 そして彼らに言われた。「『わたしの家は祈りの家と呼ばれる』と書いてある。それなのに、おまえたちはそれを『強盗の巣』にしている。」

思い出せるでしょうか、旧約の預言の最後、マラキ書でバプテスマのヨハネについての預言がありました。「3:1 「見よ、わたしはわたしの使いを遣わす。彼は、わたしの前に道を備える。あなたがたが尋ね求めている主が、突然、その神殿に来る。あなたがたが望んでいる契約の使者が、見よ、彼が来る。——万軍の【主】は言われる。」」ヨハネが、主の前に道を整える働きをしたのですが、主ご自身が神殿に突然来ます。契約の使者です。これはイエス様です。イエス様がガリラヤで行われていたような、天の御国の福音宣教と、エルサレムでの神殿の世的な姿とが衝突しました。

ここは、神殿の敷地の南側の部分、異邦人の庭でした。赤い屋根が長細く東西に延びている王家のバシリカと呼ばれているところで両替が行われていました。また、神殿に上がる階段の下の部分にも商店がありました。神殿においては、シェケルという銀貨のみが使われていました。ローマの貨幣ですと、そこに皇帝の銘のあるものは使えない、使えば冒瀆でありました。それで両替がありました。そこで、両替の手数料が半端なく高く、その間にそこを管理しているカヤパ家は大儲けしていたのです。さらに、礼拝の必要ないけにえも売られていました。欠陥があってはならないという掟があるので、調べるのですが、見つけたらそれは受け入れられません。それで既に祭司が調べた欠陥の無い動物を売っています。認証付きの鳩や羊であり、とても高価でした。

イエス様は、これらを清められました。そして、「『わたしの家は祈りの家と呼ばれる』と書いてある。それなのに、おまえたちはそれを『強盗の巣』にしている。」と言われます。強盗の巣とは、エレミヤが当時の神殿で、この神殿さえあれば自分たちは救われていると思っているところで、そんなことはない叱責しているところで使われた言葉です(7:11)。そしてその後、神殿がかつてのシロで契約の箱が奪われたように、同じようにすると宣言されました。そして事実、ローマによって後に滅ぼされます。ところで、「強盗の巣」と言われる所以が他にもあります。人々は盗賊から自分たちの金を守るために、その金庫を異教徒もそうですが、自分たちの宗教の神殿の中に入れます。まさか寺から物は盗めないみたいな感覚です。そして祭りには世界中からユダヤ人が巡礼にやってくるので、交易の一部を神殿が担っていました。イエス様は、イザヤが預言した神殿の姿、「あらゆる民の祈りの家」(56:7)となるはずなのだとされます。

14 また、宮の中で、目の見えない人たちや足の不自由な人たちがみもとに来たので、イエスは彼らを癒やされた。

イエス様は、祈りを第一とされ、それからガリラヤ宣教の時からと同じように、目の見えない人、

足の不自由な人をお治しになりました。イエス様が急に、宮に来て暴力的になったということではありません。いつものように、主は父なる神に祈り、深い憐れみ動かされて、弱っている者を助ける働きをしておられたのです。どこにいても、主にあって同じ働きをする忠実な者でありたいです。

15 ところが祭司長たちや律法学者たちは、イエスがなされたいろいろな驚くべきことを見て、また宮の中で子どもたちが「ダビデの子にホサナ」と叫んでいるのを見て腹を立て、16 イエスに言った。「子どもたちが何と言っているか、聞いていますか。」イエスは言われた。「聞いています。『幼子たち、乳飲み子たちの口を通して、あなたは誉れを打ち立てられました』とあるのを、あなたがたは読んだことがないのですか。」

祭司長にとって、ここは自分たちの陣地です。ローマとの政治的駆け引きによって、その保護を受けつつ神殿礼拝ができるようにしていたのです。自分たちの社会的地位がこのような騒ぎが起こってもらっては困ります。子供がメシアを呼び求める言葉を使っているなど、秩序の乱れも甚だしいのです。そして律法学者にとっては、律法は大人、しかも自分たちのような教師が扱うもの。それを、子供が気軽に律法の言葉を使い、叫んでいることに腹を立てています。しかし、イエス様は、「読んだことがないのですか」と彼らのプライドを壊す形で問われているのです、聖書にしっかりと、幼子、乳飲み子の口を通して神の誉れが打ち立てられるとあるのです。詩篇 8 篇 2 節です。本当にイエス様は変わりません、小さき者たちを喜んでおられます。イエス様は、そのような素直で純粹、主に拠り頼む弱き存在にこそ、力強い御国を確立してくださるのです。

17 イエスは彼らを後に残し、都を出てベタニアに行き、そこに泊まりました。

当時、エルサレムは祭りでごった返していましたが、多くの人々が都を出て宿泊しました。けれども、イエス様は身の安全を確保するという意味合いも十分にあったことでしょう。マルタとマリア、ラザロの家があるベタニアに行きました。

2A いちじく木の呪い 18-22

18 さて、朝早く都に帰る途中、イエスは空腹を覚えられた。

夜を明かして祈られていたのでしょうか、イエス様は空腹を覚えられました。

19 道端に一本のいちじくの木が見えたので、そこに行って見ると、葉があるだけで、ほかには何もなかった。それでイエスはその木に「今後いつまでも、おまえの実はならないように」と言われた。すると、たちまちいちじくの木は枯れた。

いちじくの木ですが、イスラエルでも旬は 6 月か 7 月頃であります。けれども今は、過越の祭りで

すから、春先の季節です。けれども、実は、春先に葉が出て来る時にいっしょに出て来る緑色の、こぶの形をした実があります。¹それをイエス様は求めていました。ところがありませんでした。そして、「たちまちいちじくの木は枯れた。」とあります。イエス様は、呪われるであるとか、裁かれるであるとか、そのようなことにご自分の力をこれまで用いられませんでした。「イザヤ 49:2 主は私の口を鋭い剣のようにし、御手の陰に私をかくまい、私を研ぎ澄まされた矢とし、主の矢筒の中に私を隠された。」このように、イエス様はご自分の剣としての言葉の力を、隠しておられました。けれども、今、ここでその僅かばかりの剣としての力をお出しになりました。

20 弟子たちはこれを見て驚き、「どうして、すぐにいちじくの木が枯れたのでしょうか」と言った。
21 イエスは答えられた。「まことに、あなたがたに言います。もし、あなたがたが信じて疑わなければ、いちじくの木に起こったことを起こせるだけでなく、この山に向かい、『立ち上がって、海に入れ』と言え、そのとおりになります。22 あなたがたは、信じて祈り求めるものは何でも受けることになります。」

以前も、からし種のほどの信仰があれば、山を動かすことができるという話をされましたね。ここでも、弟子たちに同じことを教えておられます。イエス様は間もなくなくなります。復活されてからも、四十日したら天に昇られます。弟子たちが自分で、主の業をしていかないといけません。もちろん、聖霊によって主が共におられます。しかし、そこには信仰が必要なのです。「この山」とはオリブ山のことでしょう。そして海に、というのは、どちらでしょうね、死海かもしれないし、地中海かもしれません。いずれにしても、イエス様は凄いことを言われていますが、弟子たちにとても分かり易いように、励ますようにして言われたのだと思います。信じ求め、そして疑わない。主の働きをする時の単純な原則です。

そして、はっきりと書いていませんが、いちじくの木やぶどうの木は、イスラエルをしばしば象徴します。実が結ばれておらず、葉が茂っているというのは、「宗教的には盛んだが、神への実が結ばれていない」という状態です。そして、呪われたというのは、その宗教自体も滅ぼされるということです。事実、歴史的にエルサレムはローマによってその神殿が破壊されました。それ以来、神殿が建てられていません。かつてバビロン捕囚の時に、エレミヤが警告していたのですが、彼らが聞く耳を持たず神殿が破壊されました。中身がなければ、そのように目で見える形でも裁かれるのです。私たちにとっての適用は、「活動はしているが、聖霊の実が結ばれていない、ということはないか？」という状態です。後でイエス様がこの問題について、ぶどう園の譬えで取り扱われます。

3A 悔い改めない者 23-46

1B ヨハネの権威 23-27

23 それからイエスが宮に入って教えておられると、祭司長たちや民の長老たちがイエスのもとに

¹ http://heartland.geocities.jp/gypsyheart_1963/dannsou20082009/dannsou20082009009.html

来て言った。「何の権威によって、これらのことをしているのですか。だれがあなたにその権威を授けたのですか。」

ここから、イエス様とユダヤ人の宗教指導者たちとの長い論争が始まります。22 章まで続き、それから 23 章で、八つの幸いならず、八つの災いをイエス様が宣言されます。その基になっているのが、ここで彼らが言っているような「権威」です。神殿において権威を持っている祭司長がおり、また長老と言っていますが、祭司職ではないけれども神殿の管轄を行っていた者たちでしょう。みな、ユダヤ人の議会サンヘドリンの者たちであった可能性が大です。ユダヤの民全体に霊的な権威を持っていました。その彼らが、イエス様が宮清めを行ったり、人を癒したり、そして教えたりする権威は、どこから来ているのかと挑んでいます。イエス様が、天からの権威だとすれば冒瀆罪で訴えることができます。人からの権威だとすれば、「ああ、では勝手にここでこんなことをしているのですね。」と言って追い出すことができます。

24 イエスは彼らに答えられた。「わたしも一言尋ねましょう。それにあなたがたが答えるなら、わたしも、何の権威によってこれらのことをしているのか言いましょう。25a ヨハネのバプテスマは、どこから来たものですか。天からですか、それとも人からですか。」

人が、陥れるような罠にかけようとする時、人を試す時に、答えないというのが賢明な業です。イエス様はそれを行われています。イエス様はご自身が主張する権威ではなく、既に行われている業によって、自ずと天からの権威であることを示しておられました。行いや業があつてこそその、イエスへの信仰です。それを拒んでいるのは彼らのほうで、彼らこそが権威に従わないという問題があるのです。そこで、イエス様はバプテスマのヨハネの権威について尋ねられました。

25b すると彼らは論じ合った。「もし天からと言え、それならなぜヨハネを信じなかったのかと言うだろう。26 だが、もし人から出たと言え、群衆が怖い。彼らはみなヨハネを預言者と思っているのだから。」

イエス様の権威が、ヨハネの権威の延長であつたことを思い出してください。ヨハネが預言者であることは、ユダの民は認めるどころでした。そのヨハネが、イエス様を証して、この方にひれ伏さなければいけないことを説きました。そしてイエス様ご自身、彼からバプテスマを受けられ、彼の働きの延長であることを示し、また説教も「悔い改めなさい、天の御国が近づいたから」という、ヨハネと同じものでした。ヨハネの権威が天からと認めるならば、自ずとイエス様も天からの権威だと認めることになるのです。

問題は、彼らは、ヨハネの権威を認めなかったのです。バプテスマは受けようとしたが、ヨハネは、「まぬしのすえたち」と言って、彼らが悔い改めなければ火で滅ぼされると宣言しました。そ

れでも、信じなかったのです。けれども、彼らにとって一般民衆が自分たちに逆らうことになれば、ローマによって管理能力がないとされて、地位を失いかねません。民はヨハネを預言者と認めていたので、彼らからの反発が恐ろしいと思いました。

27 そこで彼らはイエスに「分かりません」と答えた。イエスもまた、彼らにこう言われた。「わたしも、何の権威によってこれらのことをするのか、あなたがたに言いません。

イエス様はとても賢いです。彼らの質問は質問ではなく、問題は彼らが神の権威に従っていなかったことにあります。人の世界で、またサタンが、私たちがそういった罠に陥れようとします。私たちはエバのように答えるのではなく、イエス様のように知恵をもって答えることができますね。彼らの試問に答える必要はないのです。

2B 二人の息子 28-32

そしてイエス様は、譬えを三つ話します。一つ目と二つ目が、21章に書かれています。

28 ところで、あなたがたはどう思いますか。ある人に息子が二人いた。その人は兄のところに来て、『子よ、今日、ぶどう園に行って働いてくれ』と言った。29 兄は『行きたくありません』と答えたが、後になって思い直し、出かけて行った。30 その人は弟のところに来て、同じように言った。弟は『行きます、お父さん』と答えたが、行かなかった。31a 二人のうちどちらが父の願ったとおりにしたでしょうか。」彼らは言った。「兄です。」

ぶどう園の譬えですが、息子二人のうち、一人は思い直した人、これは悔い改めた人と言い換えることができますが、もう一人は思い直していない人、悔い改めていない人です。初めに、行きたいと言っているけれども行かないのと、行きたくないと行っても行くのと、どちらが父の願った通りなのか？と言えば、もちろん実際に行った人です。そして、イエス様は彼らに答えを導かせています。兄が働きに行ったのですから、父の願った通りにしました。

31b イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに言います。取税人たちや遊女たちが、あなたがたより先に神の国に入ります。32 なぜなら、ヨハネがあなたがたのところに来て義の道を示したのに、あなたがたは信じず、取税人たちや遊女たちは信じたからです。あなたがたはそれを見ても、後で思い直して信じることをしませんでした。

兄は、取税人や遊女たちのことでした。取税人も遊女も、律法を守ることさえも求められていない、ユダヤ人であっても見捨てられた存在でした。ですから、神に対して「働きたくありません」と言っていた兄のような姿だったのです。けれども、思い直したのです。そしてイエス様に付いて行きました。そして、弟が彼ら、祭司長たちや長老たちであります。口では、神に従っていると言っていますが、

実際は悔い改めていないので、働きに行っていない弟のようです。ヨハネの権威を認めなかった彼らに対して、その信じなかった理由を、自分たちのあり方を思い直さなかった、悔い改めなかったことがあります。ゆえにイエス様は、取税人や遊女のほうが、「あなたがたより先に神の国に入ります」と言われています。

思い直しと信仰、これは一対になっています。自分が何かをやると言っていること、その口で言っていることで私たちはしばしば、その人が霊的であるかどうかを判断しがちなのですが、その人が何を信じているかは、行いに表れます。自分が思い直して、それでその悔い改めにしたがって神を信じて歩む時に、その信仰が確かに神を信じていることが明らかにされます。何を行っているのかで自ずと、その人の信じていることが分かるのです。そして、神の国はそうした、悔い改めた者のものたちが入ります。

3B ぶどう園の農夫 33-46

こうしてイエス様は、バプテスマのヨハネのことについて語られましたが、次に、ご自身を受け入れないことについて、むしろ彼らが殺してしまうことについて話されます。

33 もう一つのたとえを聞きなさい。ある家の主人がいた。彼はぶどう園を造って垣根を巡らし、その中に踏み場を掘り、見張りやぐらを建て、それを農夫たちに貸して旅に出た。

午前礼拝でお話したように、この言葉を聞いた時に、彼らはすぐにイザヤ書 5 章の、イスラエルに対する神の愛の歌を思い出したことでしょう。そこで問題にされたのは、酸いぶどう酒です。これだけのことを神がしたのに、そこからの実がなく、むしろ悪い実が結ばれたということです。

34 収穫の 때가 近づいたので、主人は自分の収穫を受け取ろうとして、農夫たちのところにもしもべたちを遣わした。35ところが、農夫たちはそのしもべたちを捕らえて、一人を打ちたたき、一人を殺し、一人を石打ちにした。36 主人は、前よりも多くの、別のしもべたちを再び遣わしたが、農夫たちは彼らにも同じようにした。

数々の預言者を神が遣わされたことを示しています。

37 その後、主人は『私の息子なら敬ってくれるだろう』と言って、息子を彼らのところに遣わした。38すると農夫たちは、その息子を見て、『あれは跡取りだ。さあ、あれを殺して、あれの相続財産を手に入れよう』と話し合った。39そして彼を捕らえ、ぶどう園の外に放り出して殺してしまった。

イエス様が他の預言者とは異なり、神の息子、御子であることが示されています。そして、豊たたちは彼らのことですが、彼らが相続財産を手に入れようという魂胆で、彼を殺してしまいます。ユ

ダヤ人指導者は、自分たちが御子にある財産、すなわち神殿における権利を独り占めしたかったのです。私たちは、御霊の宮と呼ばれていますが、もし自分が自分の権利を主張するならば、イエス様をこのように追い出してしまう事になります。

ところで、「ぶどう園の外に放り出して」殺したとあります。事実、イエス様はエルサレムの外に連れて行かれて、城壁の外にあるゴルゴダの丘で磔にされました。

40 ぶどう園の主人が帰って来たら、その農夫たちをどうするでしょうか。」41 彼らはイエスに言った。「その悪者どもを情け容赦なく滅ぼして、そのぶどう園を、収穫の時が来れば収穫を納める別の農夫たちに貸すでしょう。」

先ほどと同じです、自分自身で質問に答えて罪に定めています。

42 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、聖書に次のようにあるのを読んだことがないのですか。『家を建てる者たちが捨てた石、それが要の石となった。これは主がなさったこと。私たちの目には不思議なことだ。』

詩篇 118 篇の箇所です、先ほど朗読しました。神よ、救ってくださいという言葉が出て来る間に、この不思議な言葉が出て切るので。神の救いは、不思議なことに石なる方、キリストを家を建てる者たちが捨てることによって、要の石となるということです。実に、見捨てられたキリストを土台として教会は建て上げられています。

43 ですから、わたしは言っておきます。神の国はあなたがたから取り去られ、神の国の実を結ぶ民に与えられます。

ユダヤ人たちに神の国が一時的に、取り去られました。紀元後 70 年です。そして、ユダヤ人たちだけでなく、異邦人も中に加えられた教会において、そこに聖霊の実が結ばれるように神はしてくださいました。23 章の最後を見れば分かりますが、ユダヤ人は最後には、主の御名によって来られる方という時が来るとあります。

44 また、この石の上に落ちる人は粉々に砕かれ、この石が人の上に落ちれば、その人を押しつぶします。」

石の上に落ちるとい表現と、石がその人の上に落ちるとい表現があります。一つ目は、イザヤ 8 章からです。「8:13-15 万軍の【主】、主を聖なる者とせよ。主こそ、あなたがたの恐れ。主こそ、あなたがたのおののき。そうすれば、主が聖所となる。しかし、イスラエルの二つの家にとっては

妨げの石、つまずきの岩となり、エルサレムの住民には罨となり、落とし穴となる。多くの者がそれにつまずき、倒れて打ち砕かれ、罨にかかって捕らえられる。」主を恐れる者には、主がそこにおられて聖所となったださるのですが、そうでなければ、自分の歩みを妨げる岩になってしまいます。私たちが絶えず、主を恐れることをすることによって、初めてその道をまっすぐに歩むことができます。悔い改めないままです、自分が躓いて滅んでいってしまってもよいものなのでしょうか？

もう一つの表現は、ダニエル書 2 章です。「2:34-35 あなたが見ておられると、一つの石が人手によらずに切り出され、その像の鉄と粘土の足を打ち、これを粉々に砕きました。そのとき、鉄も粘土も青銅も銀も金も、みなともに砕け、夏の脱穀場の籾殻のようになり、風がそれを運んで跡形もなくなりました。そして、その像を打った石は大きな山となって全土をおおいました。」先のイザヤの預言が、イエス様が初めに来られた時のことであり、今は、私たちはその時代に生きていますが、今読んだダニエル書の預言は将来の事、再臨のことです。岩なるキリストは、今、自分自身が心が砕かれれば救われます。けれども、将来、悔い改めないままに頑なにしているなら、裁かれて砕かれます。今、救いのために心が砕かれることを選びたいです。

45 祭司長たちとパリサイ人たちは、イエスのこれらのたとえを聞いたとき、自分たちについて話しておられることに気づいた。46 それでイエスを捕らえようとしたが、群衆を恐れた。群衆はイエスを預言者と認めていたからである。

こうして彼らは、この時からイエス様を捕らえようと意図します。けれども、彼らは宗教的な動機で、悔い改めるかどうかではなく、ただ自分たちを生かそうとしているだけです。群衆が自分たちの支配下にいることがもっと大事なことであり、政治的に動いています。

これは非常に残念なことです。ここの神殿が、政治的なこと、また経済的なことで動いていて、祈りと御言葉、そして良い行いという信仰的なことで動いていなかったのです。私たちもここで、自分が自分の思惑や計算で動いていないか？惰性で動いているか？それとも、祈っているか？その祈りによって動かされているか？御言葉を聞いて、それに基づいて動いているか？求めていかないといけません。